

論文の内容の要旨

氏名：中村 かおり

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題名：初年次教育におけるアカデミック・ライティングの指導法に関する研究
—アカデミックな共同体の一員としての意識を出発点に—

本論文は、大学の初年次教育の一環として行われる日本語でのアカデミック・ライティング指導において課題とされている、「何を書くか」という内容と、「どのように書くか」という形式の両面に対し、同時にアプローチ可能な指導法の提案を目指すものである。アカデミックな場に投稿される論文には、新規性のある内容と検証可能でアカデミックな書き方が求められるが、レポートは同じ文脈に位置づけられる。本実践では、概念型カリキュラム理論を援用して授業デザインを行い、アカデミックな概念を授業に取り入れ、初年次生に意識づけることで、内容・形式の両面におけるレポートの質の向上と書き手の態度の変容に効果をもたらす方法を探った。そして、そのための研究方法として、デザイン研究の枠組みを用いた。実践と評価による改善を複数サイクル行い、その過程からデザイン原則を抽出し、初年次教育におけるアカデミック・ライティングの指導法の提案を試みた。

〈序論〉

第1章「研究の背景と目的」では、研究の背景として、初年次教育におけるアカデミック・ライティング（以下AW）の指導が重要であるが、現状の指導が形式面にやや偏り、内容に関しての指導が不十分であるという課題について述べた。その上で、時間の限られた初年次教育において、内容と形式の両面にアプローチする方法として、概念型授業デザインが適していることを示し、その出発点として初年次生に対してもアカデミックな共同体の一員としての意識づけが求められることを主張した。最後に、本研究の目的として、初年次生に対するAWの指導に向けて共有資源を提供することを目指し、そのための方法として、本実践をデザイン研究の手法で行うことの意義について述べた。

第2章「レポート指導におけるアカデミックな文脈の示され方に関する調査」では、初年次生向けのライティング教材35冊を対象とした調査と8名の教員に対するインタビュー調査から、初年次生に対するAWの指導現場でアカデミックな文脈がどのように示されているかについて現状を確認した。その結果、初年次生向けのライティング教材では、レポートを書く目的は学生自身のスキルの養成とされるなど、学問的文脈とは関連づけられておらず、内容に新規性や検証可能性が求められる点についても、ほとんど示されていなかった。そして初年次生のライティング指導にあたる教員にも、同様の傾向が見られた。これらの結果から、本研究が掲げる、アカデミックな共同体の一員としての意識を出発点にする点に新規性があることが確認された。

第3章「初年次ライティング指導の課題と研究課題」では、デザイン研究の最初のステップである「問題の同定と分析」のために、初年次生に対するAW教育の先行研究を概観した。まず、ライティングの先行研究のうち、ライティング指導の基盤となっている文章産出過程モデルと知識構成型ライティングのモデルに沿って、AWに主に用いられてきた指導法を分析し、主な3つのアプローチの重点と課題について考察した。次に、文章産出過程モデルを中心に、本研究が取り組むべき課題と、その課題に対する解決方法の検討とともに、概念型授業デザインに必要なマイクロな概念の抽出を試みた。その上で、本研究の研究課題として以下の5つを挙げた。

- (1) 研究課題1：論文やレポートを用いた分析タスクは、初年次生に対するアカデミックな書き方への支援として有効か。
- (2) 研究課題2：見通しを持ったストーリー作成は、問題設定への支援として有効か。
- (3) 研究課題3：協働学習によるプロセスの言語化は、AWスキーマの形成に有効か。
- (4) 研究課題4：コメントシートを書くことはレポートを書く力の向上に有効か。

(5) 研究課題 5：本実践によるアカデミックな共同体の一員としての意識づけは、書くことに対する態度変容に有効か。

〈本論〉

第4章「授業デザイン」では、デザイン研究を行うための具体的な授業デザインについて検討した。デザイン研究における実践計画には理論的な枠組みが必須であるため、それらの要素を授業に取り入れるために、複数のインストラクショナル・デザイン（Instructional Design：ID）理論を用いた。メリルのID第一原理、ライゲルースの精緻化理論、コリンズ他の認知的徒弟制、発見的学習法の導入を軸に、問題設定、形式、授業全体に関わる指導方法について検討した。それらから、活動の指針を決定し、その指針に沿った具体的な活動を考案し、本研究の授業デザインとしてまとめた。

第5章「授業デザインに基づく授業実践（1 サイクル目）の結果」では、第4章で作成した授業デザインに沿って16名の初年次生を対象に1サイクル目の実践を行い、その結果を検証した。まず、初年次クラスでの観察とレポート分析から、本実践の問題設定への支援が有効であることが示された。次に、実践群、非実践群の専門科目のレポート分析から、実践群の専門科目のレポートは、合計の点数と「文章の構成や流れ」の評価が有意に高く、文章の構成に効果が認められた。また、実践群の専門科目のレポートには、授業資料以外の文献の引用が複数見られ、先行研究への意識づけが進んでおり、書くことに向かう態度への効果がうかがえた。そして、インタビュー調査を行い、うへの式質的分析法を参考に分析した結果から、本実践が初年次生にとってインパクトのある体験になっており、ライティングに向かう態度にプラスの効果を与えていることが示唆された。しかし、専門科目のレポートでは、レポート形式やアカデミックな書き方が不十分であり、引用の後の解釈等、論拠となる理由づけが十分になされないという問題も見られた。学生に対するインタビュー結果からもそれらへの意識が低いことがわかった。そこで、形式面に注目させ、理由づけへの意識を持たせるために、授業デザインの修正を行った。

第6章「修正版授業デザインに基づく授業実践（2 サイクル目）の結果」では、第5章で検討した修正版授業デザインに沿って16名の初年次生を対象に2サイクル目の実践を行い、その結果を検証した。まず、初年次クラスでの観察とレポート分析から、本実践の問題設定への支援に加え、引用およびレポート形式にも効果が認められた。形式面への支援は1サイクル目では不十分であったが、2サイクル目では問題設定の質は維持したままで、形式面の改善が見られた。次に、実践群、非実践群の専門科目のレポート分析では、実践群のレポートに、問題設定、形式面ともに効果が見られた。そして、授業開始時と終了時の実践群と非実践群の学生に対するアンケート調査の結果、および終了時のインタビュー調査をうへの式質的分析法を参考に分析した結果から、実践群ではレポート・ライティングのプロセスに関するスキーマ形成が、新規性や検証可能性といったアカデミックな文脈に関連づけられて進んでおり、これには本実践の活動が影響していることが示唆された。

第7章「初年次生に対する実践のまとめ」では、1サイクル目と2サイクル目の実践結果から、研究課題1-5に対する結論をまとめた。また、1サイクル目の学生に対するフォローアップインタビュー調査の結果を加え、実践結果を総括した。学生のレポートの質が、内容、形式ともに求められる水準にあり、ライティングに向かう際には、アカデミックな文脈を意識し、書くプロセスをメタ的に認知していたことがわかった。これらは本実践でデザインしたものに深く関わるため、実践による介入により、アカデミック・ライティングに対する学生の取り組み方への効果が認められた。

第8章「レディネスや専門の異なる学生に対する実践と評価」では、修正版授業デザインのうち第7章で介入の効果が認められた活動に関し、それらが文脈を超えて効果があるかどうかを考察した。実践は、アカデミック・ライティングに関わるレディネスや専門の異なる大学院生や研究生などを対象に行い、そこで対象者から得られた評価について整理し分析した。その結果、研究課題1、2、3、5に関しては、これら3つの実践においても、本研究でデザインした活動が効果的であることが示唆された。

第9章「コメントシートを書くことによるレポートへの効果」では、初年次生に対する実践で明らかに

ならなかった研究課題4のコメントシートを書くことによる効果について、専門科目での実践によって検証した。その結果、コメントシートを書くことは、そのままライティング・スキルの向上に役立つものではないが、授業内容を整理し、学びを促進する役割があることがわかった。

〈結論〉

第10章「本研究のまとめと今後の課題」では、ここまでの実践を踏まえ、初年次アカデミック・ライティング指導に関して、以下の7つの「デザイン原則の提案」を試みた。

- 原則1：アカデミックな共同体の一員であるという自覚と書く目的への意識を持たせる
- 原則2：興味のあるテーマの論文を探して読ませ、アカデミックな世界に招き入れる
- 原則3：書き方の特徴をサンプル分析タスクによって発見させる
- 原則4：背景、問い、答え、根拠の見通しを立てながらストーリーラインを作成させる
- 原則5：AWの概念を協働学習により言語化させる
- 原則6：書くためのプロセスを段階的に体験する機会を与え、メタ的に捉えさせる
- 原則7：ピア・レビューにより読み手への意識を持たせる

そして、本研究の意義として、概念型授業デザインにより、時間が限られた初年次ライティング指導において、内容面と形式面の双方にアプローチするために、アカデミックな共同体の一員としての意識づけを出発点とし、上記の7つのデザイン原則を提案したことを挙げた。最後に今後の課題について述べた。

以上の本研究の構成を図1に示す。

第1章：研究の背景と目的

初年次アカデミックライティング指導において、内容と形式の両面に対し同時にアプローチするために、アカデミックな概念を取り入れた授業デザインを検討し、提案することを目指す

第2章：レポート指導におけるアカデミックな文脈の示され方に関する調査

新規性や検証可能性などのアカデミックな概念が書き方とどの程度関連づけられているかを確認する

デザイン研究

問題の同定と分析

第3章：初年次ライティング指導の課題と研究課題

先行研究から初年次ライティング指導の課題を整理し、研究課題を同定する

RQ1：論文などを用いた分析タスクは、初年次生に対する書き方への指導として有効か。

RQ2：ストーリーラインの作成への支援は、問題設定への支援として有効か。

RQ3：プロセスの言語化は、アカデミック・ライティングのスキーマ形成に有効か。

RQ4：コメントシートを継続して書かせることはレポートを書く力の向上に有効か。

RQ5：アカデミックな共同体の一員としての意識づけは、書くことに対する主体的な姿勢の涵養に有効か。

デザイン決定

第4章：授業デザイン

ID理論を援用し、授業デザインを検討

結果の整理と改善

第5章：授業デザインに基づく授業実践（1サイクル目）の結果

初年次生が書いた文章と意識に対する調査

第6章：修正版授業デザインに基づく授業実践（2サイクル目）の結果

初年次生が書いた文章と意識に対する調査

第7章：初年次生に対する実践のまとめ

1サイクル目と2サイクル目の評価とフォローアップインタビュー調査のまとめ

第8章：レディネスや専門が異なる学生に対する実践と評価

初年次生とはレディネスや専門が異なる学生に対する実践および調査

第9章：コメントシートを書くことによるレポートへの効果

コメントシートへの取り組みとレポートとの関係に関する調査

デザイン原則の提案

第10章：本研究のまとめと今後の課題

授業デザインと実践から得られたデザイン原則を考察し、ライティングへの効果をまとめる

図1 本論文の構成